【報　　告】

荒川重理と下村湖人

大　坪　素　秋

【要　　旨】

荒川重理と下村湖人は旧制台北高等学校時代に同僚として３年間を過ごした。湖人が台北高等学校を辞職した後も両者の家族ぐるみの交流は続いた。戦中戦後の混乱の中で両者の交流は途絶えたが、戦後に湖人が出演したラジオの放送を荒川が聞いていたことがきっかけとなり両者の交流が復活する。その後まもなく湖人が死去したため戦後の両者の交流期間は短かったが、荒川夫妻と湖人の令息との交流は湖人の死後も続くことになる。

【キーワード】

荒川重理　旧制台北高等学校　下村湖人　別府大学短期大学部　三沢糾

はじめに

別府大学短期大学部の初代学部長を務めた荒川重理（あらかわしげみち）（1884−1976）は、立教中学校卒業後に札幌農学校の選科に入学し、日本の昆虫学の祖である松村松年教授のもとで学び、松村教授の研究室の助手に採用された。しかし、病のため辞職して、遠友夜学校で教えていたときの友人からの誘いによって東宇和郡立宇和農蚕学校に教諭として赴任し、その後は生涯学校教育に関わることになる。荒川は、浜松高等工業学校（現在の静岡大学工学部）講師を経て、台湾の台北高等学校で教授を務めた。台湾では短い期間であったが、台北高等学校の第三代校長下村虎六郎（下村湖人、1884−1955）と荒川の家族を通した交流があった[1]。

本稿では荒川と作家であるとともに社会教育家であった下村湖人との交流についてさらに調査を行い、両者の教育理念の比較を試みた。

1　荒川重理

『荒川重理先生の思い出』の中の「思い出の記」によると、荒川重理は明治17年に東京の本所緑町の旧幕臣の旗本荒川重豊（幼名徳次郎）の長男として生まれた[2]。重理の祖父勇太郎が早くして亡くなったため重豊は16歳で家督相続をし、幕吏の別手組として英国公使パークスの警護を担当していた重豊は維新後も新政府でその勤務を継続しつつ、苦労して弟の重平（後に海軍大学校教授として長年数学を教える）を海軍兵学校へ、次の弟の重秀（後の東京農業大学の育英黌の初代教頭などを務める）を札幌農学校に入学させた。重豊は攻玉社に入り近藤真琴に測量術を学んで、内務省地理局などで各地の測量を担当した後、そこを辞職後は私鉄の先駆であった日本

鉄道で測量の仕事を続けた。重平の長女豊子は広辞苑を編纂した言語学者新村出（重理の浜松高等工業学校時代の校長は新村出の兄の関口壮吉）の夫人で[3]、重秀は札幌農学校を首席で卒業して米国に留学したが、札幌農学校での職を拒否して米国に残り法学を修めており[4]、同じく札幌農学校に入学する重理へ少なからず影響を与えた。重理が入学した当時の札幌農学校校長の佐藤昌介は重秀と同期で、札幌農学校初代教頭クラークの教えを受けた北海道大学の前身の札幌農学校一期生であった。

立教中学校時代

学者一家の長男として生まれた荒川は、父重豊が日本鉄道の技術者として務めていた関係で実家を他人に貸して、大宮、小山、宇都宮、郡山と居を変えたので、物心ついた５、６歳頃から後の東京の実家のことは印象に残るものはなかったと「思い出の記」の中で述べている。荒川は小学校に入学した明治23年に40歳の生母静子を亡くす。さらに可愛がってもらっていた祖母（父の再婚相手側と思われる）を明治33年に亡くしている。父が職業上転々と居を変えたため、祖母の隠居所の当時の小石川西原町で中学３年まで過ごした。荒川は根岸小学校に通い城北中学に入学したが、祖母の隠居所が解散した後は築地立教中学に転校しその寮に入る。この寮生活が生涯に大きな影響を与えたと荒川は「思い出の記」に書いている。当時立教は築地河岸旧居留地にあって、中学、神学校及び立教女学校を含んだミッションスクールであった。寮はすべて個室で、クリスチャンの子弟が多い寮生は、過半数が土曜の夜の聖書の講義会に参加していた。荒川は最初反抗勢力として講義会に参加していなかったが、未信者だった荒川はそのうちに親友などに誘われて参加することになる。日曜日には原則として寮生一同は三一大会堂の礼拝に出席することになっており、時に開かれる英語会にも荒川は楽しんで出席していた。荒川はボートの選手として活動していたため肋膜を患い、一学期入院して学科が遅れ進学が危ぶまれたがなんとか及第して、概ね立教時代を楽しく過ごしていたようである。特に国語の先生に褒められて文学に関心を持ち、ロングフェローやワーズワースの詩、内村鑑三の『愛吟』や徳富蘆花の『自然と人生』などを読み浸っていたという。また、４年の終わりには級友とともに受洗してクリスチャンとなっている。荒川の立教時代の同級生には、東久邇宮内閣で戦後初めての文部大臣を務めた前田多門がいる（荒川の「思い出の記」の中では近衛内閣と誤って記されている）。前田とは、明治34年の立教中学５年生の時に、足尾銅山鉱毒事件をきっかけに東京で学生運動が起こった際に行われた学生による鉱毒被害地視察旅行に、リーダーだった前田を含む立教中学の同級生たちとともに荒川が参加した記録が残っている[5]。前田が後に記しているようにこの学生運動への参加は、未成年者であったため立教中学で問題となり、担任の先生から手厳しく叱られたとのことで[6]、荒川も同様の苦い経験をしたと思われる。旧制一高を経て東京帝国大学に入学する前田の恩師は札幌農学校二回生で遠友夜学校を開いた新渡戸稲造であった。

札幌農学校・遠友夜学校時代

荒川は立教中学卒業後、札幌農学校を受験することになるが、校長の佐藤昌介が本科受験を強く勧めたにも関わらず、健康上の理由で選科を受験し合格している。当時の札幌農学校には本科の他に選科があり、本科と異なり選科は学士が授与されず、待遇にも差があったと思われる。中学卒業のみでは選科生の資格がないので、午前は農芸科の講義に出席し、午後には松村教授の教室で学んだ荒川は、推薦を受けて遠友夜学校で教育経験を積むことになる。新渡戸稲造が開設した遠友夜学校は初等・中等教育を受ける機会が得られなかった労働者向けの社会人教育を担っていた夜学校である。荒川は隔夜交代で夜６時から９時まで理科と国語を教えていた。この遠友夜

学校での経験が、荒川に影響を与えた人達との出会いと世間を知る目を開かせてくれたと「思い出の記」で述べている。

荒川は農芸科卒業後に札幌農学校から名称変更した東北帝国大学農科大学の松村教授の研究室に助手として採用されるが、しばらくして病に罹りその療養のため札幌を離れて、結局職を辞することになる。そして、遠友夜学校で教えていたときに知り合った末光績が校長代理を務めていた東宇和郡立宇和農蚕学校に教諭として赴任し、勝世夫人と出会う。その後、松山農学校教諭、松山高等学校講師などを経て、浜松高等工業学校時代に台湾の台北高等学校の三沢糾校長の誘いにより台湾に渡ることになる。浜松高等工業学校時代の校長は新村出の実兄の関口壮吉で、勝世夫人が『荒川重理先生の思い出』の対談の中で新村出から誘いがあったと述べている。

台北高等学校時代

台北高等学校同窓会の蕉葉会が昭和45年に発行した『台北高等学校（1922年−1946年）』によると、三沢糾は台北高等学校の第二代の校長で[7]、台北高等学校の自由な校風を創った人物とされている[8]。三沢の後任の第三代の校長が下村虎六郎、後の下村湖人である。荒川は台北高等学校に昭和２年から昭和18年まで奉職することになるが、退職の理由は定年ではなく、校長に竹槍の訓練をさぼったことを咎められたことが原因だったと勝世夫人が『荒川重理先生の思い出』の座談会の中で教え子たちに明かしている[9]。台北高等学校を退職後しばらくして、荒川は台北帝国大学に講師として職を得ることになる。台北高等学校の卒業生の受け皿として設置された昭和３年創立の台北帝国大学には、札幌農学校の松村教授の研究室で先輩だった素木得一教授が理農学部長として在籍していた[10]。終戦後、台北帝国大学は中華民国国立台湾大学に名称変更するが、昭和21年に荒川は台湾大学で教授として留用され、翌年に留用解除後日本に素木とともに帰国する。その際のエピソードとして、勝世夫人は座談会の中で、戦争が終わり日本に引き上げることを決めた際に、中国から来た学長に熱心に慰留された経験について、何故慰留されたのかわからなかったが、後になってその学長が札幌農学校出身で、当時札幌農学校出身者に留まるよう働きかけていたことを知ったと述べている[11]。

２　下村湖人

下村湖人の愛弟子である永杉喜輔の『下村湖人伝』によると[12]、湖人は荒川とおなじ明治17年の10月３日に佐賀県神埼郡千代田町の旧家の内田家の二男として生まれ、虎六郎と名付けられる。内田家の家産は傾いていき、佐賀中学時代には実家は完全に没落し、下村家の援助を仰ぐことになる。荒川と同様、生母を10歳の小学校時代に亡くしている。

湖人は『次郎物語』の作者としての小説家、教育家として一般には知られているが、その本領は教育家であるといわれている[13]。『次郎物語』で湖人の名前が広く世に知られるようになったのは50代以降で、遅咲きの小説家といえる。湖人の教育歴を見ると、東京帝国大学文科を卒業後、明治44年の27歳の時に母校の佐賀中学の英語教諭となってからは、各中学・高校で教頭や校長を務めており、昭和６年に46歳で台北高等学校校長を辞するまで20年に渡って学校教育に関わっている。台北高等学校を辞してからは学校教育から離れて、東京で社会教育に深く関わっていく。『次郎物語』には湖人の過去の教育経験が反映された部分が多く見られる。湖人の教育思想に関しては、永杉をはじめ諸氏より論じられている。中学時代から詩歌を発表し詩人としての才能が認められていた湖人は、大学卒業後も文筆活動を続けることを望んでいたが、下村家の事情で断念して郷里に戻り教員となる。学校教育に携わっている間は文筆活動を控えていたが、台

湾時代に短歌会の「あらたま」に入り、歌人としての活動が活発化する。また、唐津中学校など多くの校歌の作詞を行っている。

田沢義鋪と高田保馬

五高時代に湖人と出会いお互いに大きな影響を及ぼしあった人物に田沢義鋪と高田保馬がいる。田沢は明治42年に東京帝国大学法科大学政治学科を卒業した政治家・社会教育家で「青年団の父」として知られ、田沢の理念を湖人が実践を行ったといわれている(14)。唐津中学校長だった湖人は田沢の推薦で台中第一中学校長として転任し、大正14年から昭和６年までの６年間を台湾で過ごしている。なお、湖人は台中第一中学校長時代に台湾人の生徒によるストライキを経験している(15)。

五高と佐賀中学時代の一年先輩の高田は経済学者・社会学者として知られる一方で歌人としても知られ、湖人の生涯に渡って友人でありよき理解者であった。高田は明治43年に京都帝国大学文科大学哲学科を卒業しており、湖人の多くの著作に解説を寄せている。高田は昭和31年発行の『下村湖人全集　第16巻　現代訳論語』の巻尾の解説の中で以下のように述べている(16)。

> ところが湖人においては、家庭における教養からちがう。厳父の漢学によって詩作の手ほどきを受け、経書の素読を習ってから中学に進んだのであるが、ねむたかった講義からも深き感動を受け、ことに論語を一生の指南としたことと思われる。
>
> （中略）
>
> 湖人は最も早く聖書に親しんだ一人であったが、年少葉隠の精神を身につけていたし、それに家庭の東洋的訓育はきびしかった。教会の中に飛びこむだけの信念を抱かなかったのも自然である。も一つの流れとしては、芽ばえんとする社会主義の風潮があった。私はその潮流の水先を感知していたが、この点において湖人と少しく感覚の差異を感じていた。この点において、湖人は郷里の中学の空気を最もよく身につけた一人であり、東洋的風格を行動、理論の中にたたみこみながら、その感性の中には西洋詩魂の新鮮なる脈搏を示しつづけておった。

高田は湖人と一年違いで佐賀中学に入学し、同じ先生による授業を受けているが、家庭での教育の違いが高田にとっては興味がもてなかった漢文の先生による『論語』の講義の理解度の違いを生み出した原因と結論付けている。

３　台北高等学校での荒川重理と下村湖人

『台北高等学校（1922年−1946年）』によると、台北高等学校は大正11年４月に開校した７年制の旧制高等学校で、４年の尋常科と３年の高等科からなる。尋常科は定員40名の難関で、尋常科の生徒は４年の就学期間を終えた後、直接高等科に進学できた。高等科は文科と理科に分かれており、それぞれ40名ずつの２クラスあり、尋常科出身以外の中学卒業生が高等科の入学試験を受験し、160名が尋常科の卒業生とともに高等科に入学した。なお、台北高等学校が開校した大正11年には１年生と２年生の40人ずつが同時に尋常科に入学した。内地出身者以外にも、母国語が日本語でなかった台湾出身者も少数であるが入学できた。教員も荒川のように尋常科と高等科を併任するものもあった。さらに昭和３年の台北高等学校の第一回生の卒業と同時に、卒業生の受け皿として昭和３年４月に台北帝国大学が開設された。台北高等学校の習慣として、台湾人生徒を差別することなく平等に薫育する伝統が構内に横溢していた。また、台湾語を習得させるた

め、随意科目として台湾語の授業が初代の松村伝校長の時代に設けられた。人口では多数を占める台湾人の入学できる生徒数は少数であるものの、他の台湾の学校と異なり、台北高等学校内では台湾人生徒に対する差別はなく平等に扱われ、内地人の学生との争い事もなかったといわれる。

三沢糾校長

熱心なキリスト教信者でもあった三沢糾校長は初代の松村校長の後大正14年に二代校長として赴任した。湖人は昭和３年９月に三沢校長の誘いで台中第一中学校長から台北高等学校に転任し、翌昭和４年11月に三沢の後任の三代校長となるが、昭和６年９月に辞任する。台北高等学校の自由で自主独立を重んじる校風は、三沢校長と三沢の推薦によって後任になる下村校長の時代に培われた。三沢校長が去った後入学した学生たちも先輩たちと同様に自分たちの養護者として三沢校長を崇拝していた。三沢の後任の下村校長が不幸な形で台北高校を辞職するのもこの事が影響して、学生たちが崇拝していた三沢校長を追い出した張本人であると間違って受け取られていたのではないかと『台北高等学校（1922年−1946年）』の中で卒業生が述べている[17]。三沢と湖人は五高と東京帝大の両方の先輩と後輩で、三沢は文学に対する造詣が深く、湖人は心から傾倒していたという。その湖人を三沢校長は教頭として台北高等学校に迎えることになる。当時の台北高等学校は五高出身者と広島高等師範学校出身者の２つの派閥に分かれており、広島高等師範学校出身の教員からは中学校長だった湖人が教頭に抜擢されて暫くして校長となっていく三沢主導の人事に対して反発もあったようである。このような状況下に湖人が三沢の後任の校長になってから有名な台北高等学校の学生のストライキが起こった。三沢は昭和４年に京都帝大に去ることになるが、生徒監制度の廃止など、三沢の自由で学生の自主性を尊重する教育理念に対して、台湾総督府の視学官らの反発が退任の一因であったといわれている。

荒川は湖人と同様に、三沢校長の誘いで浜松高等工業学校から台北高等学校に昭和２年に転任して、昭和18年まで奉職した。本来なら昭和19年で定年を迎えるはずであったが、上記の理由で官僚出身の校長から非難され一年早く退職を迎えた。台北高等学校尋常科の寮監も務めていた荒川は主に修身などの尋常科の授業を受け持っていたが、高等科の動物学実験の授業も赴任当初から兼任していた。

荒川が台北高等学校に赴任する昭和２年から湖人が退職する昭和６年までが、両者が台湾で過ごした時期で、そのうち昭和３年９月から６年９月までの３年間を両者は台北高等学校で一緒に過ごしている。台北高校での両者の交流は以下の３つの資料の中で認められる。まず、『荒川重理先生の思い出』の座談会の中で湖人の令息の下村覚と荒川夫妻の交流が紹介されており、そして残り２つは湖人の長女の明石晴代の著書の『『次郎物語』と父下村湖人』と[18]、永杉喜輔の『下村湖人伝』である[19]。『荒川重理先生の思い出』の座談会において、荒川の死後、勝世夫人と荒川の台北高等学校時代の教え子たちに混じって、台北高等学校の尋常科に一年間在籍した下村覚が登場する。座談会の中で、湖人が台北高等学校を退職して東京に戻る際に、下村覚が預けられた荒川夫妻の家で一年間過ごしたときのエピソードが紹介されている。明石と永杉の著作からの引用を以下に示す。

まず明石は『『次郎物語』と父下村湖人』の中で以下のように述べている。

> ところが、その年の春に台北高校の尋常科（付属の中学）に入学したばかりの覚が、「僕は、今の学校で勉強を続けたい。卒業までというのが無理なら、せめて学年末の来春までででも……」と言い出したのである。体格も標準より小さくて弱々しい感じのこの子が……と両親

は驚くばかりで、最初の間はあまり問題にもしなかった。しかし覚の気持ちはもう変わらないと知って、母は少なからずうろたえてしまった。例の心配性から、子供たちの修学旅行には無論のこと、日帰りの遠足にもきまって手伝いの静やを同行させねば気のすまぬ母であった。かけ替えのない長男と、半年以上も離れて暮らさねばならないなど、とうてい考えられないことである。そのうえ、母は徹の出産後、心臓弁膜症との診断を受けており、脚気症状も加わったために授乳を禁じられ、近所の方にもらい乳をお願いする始末であったから、自分の健康についても大きな不安を感じていた。

そんなことで困惑している矢先、それまで徹のことをまるで実子のように大事にしてくださり、住居も近くだったので、毎日のように家に遊びに見えていた奥様から「私たちでよかったら、覚さんを預かってもよい」との助け舟が出され、両親も「荒川御夫妻なら……」ということで、やっと決心をつけたのだった。故荒川重理先生は当時、高校の理科系の教授で、ご夫妻ともに熱心なクリスチャンであり、家庭の雰囲気が非常に清純であった。下の弟の徹に対する夫人の愛情があまりに深いので「養子に欲しい」などと言い出されはしないかと父母はいらぬ心配をした程で、私たちも、いつのころからか「荒川のママちゃん」と呼んでお慕いするほど親しみの持てる方であった。

同様に、『下村湖人伝』で永杉は、以下のように記している。

湖人は退官の発令をまって、台湾をひきあげることにした。引き上げ間際になって、台北高校の教授で親しくしていた荒川重理（現、別府大学教授）が、次男の覚を台湾にあずかってやろうと申し出た。覚は日ごろ荒川夫人になついていたので、台湾にのこるといった。荒川教授夫妻には子どもがなく、熱心なクリスチャンで、家庭のふんい気が清純であたたかかった。湖人夫妻もこれなら安心、それに覚が入ったばかりの中学校に一年だけは残りたいというので区切りがつくまで預ってもらうことにした。

以上のように、荒川夫妻が申し出て湖人の次男の覚を預かろうとしていた様子が描かれていて、尋常科一年の覚は下村家が台湾を去った後も一年間荒川夫妻と台湾で過ごした。しかしながら、覚が荒川夫妻と一緒に過ごした後については明石と永杉の著書の中でそれ以上は触れられていない。終戦後の荒川と湖人の交流については、池田書店の『下村湖人全集　第８巻』の書簡集の中に以下の通り記録として残されている[20]。

二二〇（六月二十一日百人町から、荒川重理宛）
御手紙拝見、くわしく御近況を承ることが出来ましてうれしく存じました
悠々御自適の御生活羨ましく存じます
一度御地にも参上親しく御目に掛かって昔を談じたいと存じています
ラジオが御耳をけがしました由、放送局員から口頭試問をうけてまごまごしている様がある程度おわかりの事と存じます、汗顔の至りです、しかしこんな事がきつかけで御手紙をいただくことが出来たと思うとやはりそれだけの意味はあつたようです、放送局員にも感謝せずばなりますまい
仰せの通り近来の世相は全く無茶苦茶です、政治も教育も産業も殆ど行き詰まりの状態で正に末期的症状です、これを憂える声は各所にきこえていますが、其の力が集結されていませんためになんの効果もありません

何か大きな衝撃が来るまでは当分この状態がつづくでしょう、しかしそのうちきつとどこからか大きな革正運動が起るでしようからまだまだ絶望するには早いと思います。お互に生きている限りは微力をつくしましよう

写真も出来ましたので延引ながら御礼のつもりで家族全部が揃つたのを御目にかけます　徹の学生服は少し古いもので只今は背広姿になつてゐます、徹も覚の会社に働いてゐます　それにつけても台北時代の事が思ひ出されます、覚は少年でしたし、徹は毎日ママちやんに抱つこされていたのでしたがとにかく一人前に生長しました、いただいた御二方の御写真を示してその当時の事を話しましたら覚は無論のこと何一つ記憶のない徹も非常になつかしがり「ひまが出来たら一度別府に行つて見たいなあ」などなど申しておりました、

手が不自由で文字が型をなしませんどうか御判読下さい　末筆ながら御健康を祈ります

六月八日　　湖人老生

荒川重理様

かつよ様

以上の昭和29年の荒川夫妻宛の書簡より、荒川と湖人は戦後のかなり長い間連絡が取れてなかったと判断できる。湖人が出演したラジオの放送を別府大学短期大学部長に就任したばかりの荒川が聞いたことがきっかけとなって、戦後の両者の交流が再開したようである。書簡にもある通り、当時の湖人は病気が進行して思うように文字もかけない状態になっており、この書簡から一年を待たず世を去ることになる。『荒川重理先生の思い出』にあるとおり、湖人の死後は、湖人の令息の下村覚と荒川夫妻の交流が始まることになる。下村覚と荒川夫妻のその後の交流の詳細については『荒川重理先生の思い出』の座談会以外には詳しい記録は残っていない。この座談会の中で、下村覚が荒川の死後、近所のお魚屋さんを通して、毎週、月、水、金にお刺身を勝世夫人に届けさせていた様子が紹介されている。戦後に下村覚は湖人から援助を受けて友人と貿易会社を起し、弟の下村徹もその会社に入って仕事を手伝うことになる(21)。作家でもある下村徹は、戦後まもなくアメリカと日本を行き来してその会社の企業戦士として働いた貴重な経験を小説として描いている(22)。

4　荒川重理と下村湖人の教育理念

『別府大学の三十年』の中に別府大学短期大学部の初代学部長を務めるにあたっての荒川の抱負が述べられているので以下に引用する(23)。

四年間をもって完成教育とする日本の教育体系の中において、短期大学では二年或いは三年を以って一応の完成教育を成そうとされている。短期大学は、昔の専門教育と同じかというと、昔の専門学校は職業技術を身につける課程であって今日の短大とは少々内容が異なる。あくまで教養科目に重点を置いて、一個の社会人としての人間を形成する為の学校が今日の短大といわれる。職業基礎教育と一般教養科目と同時に学習するのであるから、四年生学部に比して学生に要求されるエネルギーは大きい。（中略）学生は、自信と信念とをもって学習に又運動に励んでもらいたい。

以上から、当時の荒川は短期大学部において教養科目を重視し、学生それぞれの人間形成に力を入れていたことが理解できる。昭和25年に開校した別府女子大学は当初入学者が少なかったの

で、昭和29年に別府大学に名称変更して男女共学となるとともに新たに短期大学部が開設された。短期大学部長であった荒川の意気込みが窺える。当時70歳と高齢であった荒川に対しての期待も高かったと思われる。荒川は台北高等学校時代には尋常科と高等科の教育を担当し、高等科の文科と理科の両方の学生の進路に大きな影響を与えている。戦後の沖縄で初のアナウンサーを務めた川平朝清は、尋常科２年の夏休みに蜂の採集に挑んだ際に荒川から褒められて熱心な指導を受けたという[24]。『台北高等学校（1922年−1946年）』の中の卒業生の思い出の中にもそのような荒川からの影響がいくつか紹介されている[25]。また、『荒川重理先生の思い出』の、別府大学で同僚だった土屋工と故二宮淳一郎名誉教授、短期大学部卒業生の草本美沙、工藤隆子、渡辺小枝子の思い出文や、『別府大学学長佐藤義詮先生　古希記念論集』の土屋工の「別府大学の思い出」からも荒川と学生たちとの心の結びつきの強さが感じられ、荒川が学生一人ひとりへ愛情を注いで人間形成に力を入れていたことがわかる。

三沢糾校長の自由主義の教育理念

荒川と湖人の両者に大きな影響を与えた重要人物が、両者を台北高等学校に勧誘した三沢糾校長である。アメリカでの留学経験がある三沢は、「自由と創造」を重んじる、学生の自主性に重きをおいた教育を行ったことで知られる。三沢の教育方針は、三沢が去ってからも長く引き継がれていく台北高等学校の自由な校風の基礎となっている。また、荒川と湖人も三沢の自由主義の教育理念に強く惹かれていた。その点で荒川と湖人の教育方針は三沢の教育方針の流れを汲むもので両者に共通点が多かったと想像できる。三沢は文学と芸術に対する造詣が深く、三沢に認められた荒川と湖人の両者も同様である。中学時代より詩歌の才が認められていた湖人はいうまでもなく、荒川についても中学時代より詩歌や文学に傾倒しており、昆虫学者の小西正泰は『虫と人と本と』の中で荒川の著作『趣味の昆蟲界』を取り上げて「文系の昆虫学」と称賛している[26]。三沢と湖人及び三沢派の教員は台北高等学校を去ることになるが、残った荒川は三沢の教育方針を引き継いでいく。そのうち戦局が悪化し、軍国主義が台頭して自由主義の教育方針が排除されていく中、戦争末期には台北高等学校での荒川の立場も悪化して退職せざるを得なくなる。荒川は、戦前の台北高等学校時代の教育方針を、戦後の別府大学短期大学部において踏襲していたものと思われる。戦時体制下に排除されていた大正デモクラシーの自由主義の教育方針は戦後復活するが、この方針転換には立教中学時代に荒川の同級生だった前田多門が終戦直後の文部大臣として関わっている。

一方、台北高等学校を退職後に湖人は学校教育から足を洗って、東京の「青年団の父」として知られる田沢義鋪のもとで田沢の理念を実践して行った。こうして社会人教育に深く関わっていく中で、湖人の過去の経験を元に構想を練った『次郎物語』は生まれることになる。しかしながら、田沢の理念を湖人が実践する社会教育運動も、戦局が悪化する中、軍部により活動が制限されて、昭和19年に田沢が不幸な形で59歳の生涯を終えることになる。京都帝大に移った三沢も軍部の台頭に反発し、満州において昭和17年に63歳で死を迎える。

湖人は個人ごとにテーマを持って研究を行う「一人一研究」を奨励して、個々人の自主性を重んじる教育方針であった。これは湖人の愛弟子で、大分で社会人教育に携わっていた吉田嗣義の著作にも紹介されている[27]。同じく永杉喜輔は、青年団講習所時代に湖人から受けた教育を表す言葉として「友愛」、「創造」、「自律」をあげている[28]。

『論語』と『論語物語』

田沢の理念を引き継いだ湖人は戦中戦後に渡って多くの人材の育成に関わり、湖人の門下生たちは日本各地に広がっていった。その具体的な教育方法については、戦前に青年団講習所で行われていた共同生活のもとの塾風教育の実践であり、仲間たちと寝食をともにして一緒に学んでいく中で人間性と社会性を涵養するものであった。その湖人の教育理念の基礎となるのが『論語』であると湖人自身も述べている。『次郎物語』も『論語』の教えを表したものといわれる。湖人の著作には『次郎物語』の他に『現代訳論語』や『論語物語』などがあるが、台北高等学校の湖人の教え子を含めて湖人をよく知るものは湖人の最高傑作に『論語物語』をあげている。湖人の『論語』に関する理解については、湖人の生涯の友であった高田保馬も解説の中で述べているとおりである。田沢と湖人の深いつながりにも『論語』に対する理解が関係している。これは『論語』の教育における重要性を示すものといえる。「自由と創造」の自由主義で知られる三沢糾の『論語』への理解も湖人と同じく深いものであったと思われる。

筆者は、荒川が退職するにあたって別府大学附属図書館に寄贈した蔵書の調査を行ったところ、湖人の死の直後の昭和30年10月に池田書店から出版された改訂版の『下村湖人全集　第八巻　論語物語』を認め、その中に荒川の朱印を最初と最後のページの二箇所発見した（図１）。また、傍線が複数引かれてあることから熱心に読んでいた形跡が認められるので、荒川も高田保馬と同様に湖人の『論語』への理解に感銘を受けていた可能性が高い。これと同時期に池田書店から出版された『下村湖人全集』の第13巻の『煙仲間』と第16巻の『現代訳論語』も図書館に所蔵されており、こちらの２つには荒川の朱印は認められなかったが、『下村湖人全集　第八巻　論語物語』と同様に湖人が生前に荒川に献呈をするよう出版社へ指示していたものではないかと考えている。事実ならば荒川と湖人の交流を示す貴重な資料といえる。

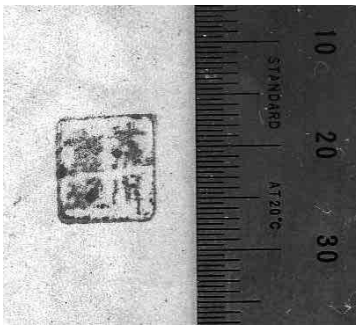

図１　『下村湖人全集　第八巻　論語物語』の荒川重理の朱印。

俳人川島つゆ

荒川が別府大学に在籍していた当時、文学部教授で俳人の川島つゆが短期大学部において教鞭をとっていた。『評伝　川島つゆ（上）― 己が墳は己が手で築くべきである』によると、川島は埼玉県出身であるが、関東大震災当時に東京の本所の荒川の実家近くに住んでおり同様に被災している[29]。本所付近は震災後発生した火災による被害が特に大きかった。別府大学に荒川が赴任した当時すでに川島がおり、詩歌に造詣が深く大夢という雅号で詩を好んで書いていた荒川と、８つ年下の川島には交流があったと思われる。実際に、『評伝　川島つゆ（上）― 己が墳は己が手で築くべきである』の９頁の、昭和30年の川島の著作の『おらが春新解』出版記念会の記念写真に、佐藤義詮学長に混じって、荒川が川島の近くに認められる（図２）。川島の隣には別府大学関係者がおらず、佐藤義詮学長は後列にいることから、場所は別

図２　『評伝　川島つゆ（上）― 己が墳は己が手で築くべきである』の９頁の、『おらが春新解』出版記念会の記念写真より、左端が川島つゆ、右端が荒川重理。

府大学でなく亀川の国立別府病院での撮影と思われる。当時川島は国立別府病院付属高等看護学院で講師を兼任していた。佐藤義詮学長よりも荒川が川島の近くにいる理由として、荒川の台北高校時代の教え子（18理乙卒　古寺秀喜）が国立別府病院にインターンで在籍しているなど、短期大学部長の荒川と国立別府病院との浅からぬ関係があったのではないかと推測される。別府大学文学部教授の川島は、短期大学部においても学生の教育に深く関わっており、多くの卒業生たちに影響を与えた。それには文学などの教養科目を重視する荒川の意向も関係していたのかもしれない。

以上のように、荒川と湖人そして三沢には文学と英語に対する造詣が深いという共通点があり（湖人は東京帝大で英文学を専攻している）、文学などの教養を学校教育あるいは社会人教育に積極的に活用して人間形成を促進しようと考えていたのではと思われる。

荒川重理と下村湖人の年表

荒川重理略年表　　下村湖人略年表

荒川重理（大夢）	西暦	歳	年号	下村虎六郎（湖人）
１月14日東京市に長男として生まれる	1884		明治17	10月３日佐賀県神埼郡千歳村の内田家に二男として生まれる
３月31日私立立教中学校卒業	1902	18歳	〃 35	
５月１日札幌農学校農芸科入学	1903	19歳	〃 36	３月佐賀中学校卒業、９月第五高等学校入学
３月31日札幌農学校農芸科卒業	1906	22歳	〃 39	７月第五高等学校卒業、東京帝国大学文学科入学・英文学専攻
９月１日東北帝国大学農科大学助手	1907	23歳	〃 40	
	1909	25歳	〃 42	７月東京帝国大学文学科卒業、12月佐賀連隊入隊
４月１日愛媛県東宇和郡立宇和農蚕学校教諭	1910	26歳	〃 43	佐賀連隊除隊
	1911	27歳	〃 44	12月母校の佐賀中学校英語教師
	1913	29歳	大正２	12月下村家長女の菊千代夫人と結婚
７月27日勝世夫人と結婚	1914	30歳	〃 3	
	1915	31歳	〃 4	１月長女晴代出生、翌年５月長男辰彦出生
４月１日愛媛県立松山農学校教諭	1917	33歳	〃 6	
『趣味の昆蟲界』出版	1918	34歳	〃 7	６月長男辰彦病死、７月次男覚出生、11月唐津中学校教頭に転任
９月１日松山高等学校講師	1920	36歳	〃 9	鹿島中学校校長に転任、６月次女満代出生
６月17日栃木県立矢板農学校教諭	1921	37歳	〃 10	
３月20日浜松高等工業学校講師・９月に関東大震災で実家が被災	1923	39歳	〃 12	12月唐津中学校校長に転任
	1925	41歳	〃 14	１月三女照代出生、６月台湾の台中第一中学校長に転任
３月31日台北高等学校教諭兼助教授	1927	43歳	昭和２	
82歳で父重豊が死去	1928	44歳	〃 3	９月台北高等学校に転任（教諭兼教授）
	1929	45歳	〃 4	11月台北高等学校校長、翌年１月三男徹出生

荒川重理（大夢）	西暦	歳	年号	下村虎六郎（湖人）
12月31日台北高等学校教諭兼教授	1931	47歳	昭和６	９月台北高等学校校長退任、東京都新宿区百人町に定住、大日本連合青年団嘱託
	1932	48歳	〃 7	１月より筆名「虎人」を「湖人」に改める。大日本連合青年団指導主任
	1933	49歳	〃 8	４月大日本連合青年団講習所長
	1936	52歳	〃 11	１月『次郎物語』の執筆に着手、雑誌『青年』に連載
	1937	53歳	〃 12	３月『次郎物語』の連載中止、４月大日本連合青年団講習所長辞任
	1938	54歳	〃 13	12月『論語物語』出版、壮年団中央協会理事就任、中国視察
	1939	55歳	〃 14	雑誌『壮年団』で「煙仲間運動」提唱、全国を遊説
	1941	57歳	〃 16	２月『次郎物語』（後の次郎物語第一部）出版
	1942	58歳	〃 17	５月『続次郎物語』（後の次郎物語第二部）出版
９月台北高等学校退任	1943	59歳	〃 18	
７月18日台北帝国大学農学部講師	1944	60歳	〃 19	11月『次郎物語第三部』出版
戦災により東京の実家が再び被災	1945	61歳	〃 20	５月に戦災により家屋、家財、蔵書のほとんど全焼、９月24日に入院中の菊千代夫人死去
１月21日中華民国国立台湾大学教授	1946	62歳	〃 21	
４月28日留用解除帰国	1947	63歳	〃 22	10月ＮＨＫから「郷土建設・小豆島の煙仲間」放映
３月31日愛媛県立宇和高等学校教諭	1948	64歳	〃 23	１月「新風土社」をおこし、月刊『新風土』創刊、「煙仲間運動」の拠りどころとする
	1949	65歳	〃 24	４月『次郎物語第四部』出版
	1950	66歳	〃 25	５月から８月まで病臥、５月月刊『新風土』廃刊
	1951	67歳	〃 26	５月『少年のための次郎物語』第一巻出版
４月１日別府女子大学教授	1952	68歳	〃 27	『少年のための次郎物語』第二巻出版、ＮＨＫより「こどものこころ」放送
４月１日別府大学短期大学部長	1954	70歳	〃 29	『次郎物語第五部』、『現代訳論語』出版、11月に入院
	1955	71歳	〃 30	４月20日東京にて死去
５月15日別府大学名誉教授	1970	86歳	〃 45	
２月16日別府市にて死去	1976	92歳	〃 51	
７月24日『荒川重理先生の思い出』発行	1977		〃 52	

荒川重理については、『荒川重理先生の思い出』236、237頁の略年譜を参考にした。
下村湖人については、永杉喜輔著『下村湖人伝 ― 次郎物語のモデル』の略年譜の302-306頁を参考にした。

おわりに

荒川重理と下村湖人は台湾の台北高等学校時代に出会い、文学に対する造詣の深い二人の間には家族ぐるみの交流が生まれた。台北高等学校での両者の交流は自由主義の教育で名高い三沢糾がもたらしたもので、３人の間には共通の嗜好が認められ、教育理念にも共通点が多かったものと想像できる。

そのような教育理念のもと、荒川は学部長を務める別府大学短期大学部において教育を実践していったと思われる。別府大学創設者の佐藤義詮学長は文化学院出身で、大正時代に西村伊作や与謝野晶子等によって創設された文化学院では戦時中も自由主義の個性を尊重する教育を実践していた。一般教養を重視し、学生それぞれの人間形成に力を入れていた荒川の教育方針は、文化学院出身の佐藤義詮学長の掲げた「真理はわれらを自由にする」という建学の精神と融合し、別府大学短期大学部の教員に受け継がれていったと思われる[30]。

このように別府大学短期大学部の創設に重要な役割を果たした荒川に関しての資料は非常に少なく、今後荒川に関する未発見の資料が発掘されることを期待したい。

注

（１）大坪素秋、「文集『荒川重理先生の思い出』についての考察」、『別府大学大学院紀要』24、132頁、(2021)

（２）「思い出の記」、『荒川重理先生の思い出』、荒川先生の会、211頁、昭和52年７月24日発行（1977)、なお、「思い出の記」には父重豊の名前は出ていない。

（３）樋口雄彦、「荒川重平回想録 ― 昭和から振り返る旧幕臣の幕末・明治」、『国立歴史民俗博物館研究報告第136集』、206頁、平成19年３月（2007）

（４）外山敏雄、「札幌農学校草創記の人々 ― W. P. Brooks 及び荒川重秀を中心として」、日本英学史学会、『英学史研究』、７号（1974）

（５）工藤英一、「足尾銅山鉱毒事件と明治学院」、『明治学院百年史資料集　第１集』、明治学院百年史委員会、昭和50年３月20日発行、７頁、(1975)

（６）黒沢英典、「前田多門の教育理念（その１）― 敗戦直後の文教責任者として」、『流通経済大学論集』、経済学部学術研究委員会　編、13（１)、(1978)

（７）大越伸、「台北高校をめぐる台湾の教育事情」、『台北高等学校（1922年−1946年)』、蕉葉会、３頁、昭和45年12月25日発行（1970）

（８）吉村邦寿、「三沢先生のまいた種」、『台北高等学校（1922年−1946年)』、蕉葉会、125頁、昭和45年12月25日発行（1970）

（９）「座談会」、『荒川重理先生の思い出』、荒川先生の会、226頁、昭和52年７月24日発行（1977）

(10) 小西正泰、「台湾昆虫学の開祖　素木得一」、「第３章　虫と人物と著作と」、『虫と人と本』、創森社、227頁、平成19年８月22日発行（2007）

(11)（９）に同じ

(12) 永杉喜輔、「下村湖人　略年譜」、『下村湖人伝 ― 次郎物語のモデル』、柏樹社、昭和45年５月10日発行（1970）

(13) 野口周一、「下村湖人、校歌作詞は余技に非ず。」、『交錯する比較文化学：日本比較文化学会関東支部30周年記念論集』、開文社出版、321頁、平成28年２月25日発行（2016）

(14) 野口周一、「下村湖人、校歌作詞は余技に非ず。」、『交錯する比較文化学：日本比較文化学会関東支部30周年記念論集』、開文社出版、302頁、平成28年２月25日発行（2016）

(15) 張季琳、「第三章　台中一中ストライキ事件」、『台湾における下村湖人 ― 文教官僚から作家へ』、東方書店、47頁、平成21年３月20日発行（2009）

(16) 高田保馬、「解説」、『下村湖人全集　第16巻　現代訳論語』、池田書店、昭和31年７月20日発行（1956）
(17)「座談会３　朝な夕なに天かける」、『台北高等学校（1922年−1946年）』、蕉葉会、58頁、昭和45年12月25日発行（1970）
(18) 明石晴代、『『次郎物語』と父下村湖人』、勁草書房、171頁、昭和62年１月７日発行（1987）、明石晴代、『『次郎物語』に賭けた父・下村湖人』、読売新聞社、176頁、昭和45年３月30日発行（1970）
(19) 永杉喜輔、『下村湖人伝 ― 次郎物語のモデル』、柏樹社、152頁、昭和45年５月10日発行（1970）
(20) 下村湖人、『下村湖人全集　第８巻』、池田書店、300頁、昭和40年４月20日発行（1965）
(21) 野口周一、「下村湖人と永杉喜輔」、『人物研究　第48巻』、近代人物研究会、28頁、令和３年12月10日発行（2021）
(22) 作家－下村徹－父「下村湖人」の背中を見ながら」、取材：アートセンターサカモト・ビオス編集室／平成29年11月29日、(2017)、http://www.bios-japan.jp/bios40. html
(23) 三十周年記念誌編集委員会　編集、「文学部と短期大学部の発展」、『別府大学の三十年』、58頁、昭和53年３月20日発行（1978）
(24) 鈴木玲子、「生徒の自主性重んじる校風　個性的な面々が多かった台高」、『沖縄、台湾をつむぐ～川平家物語』、毎日新聞、令和３年６月23日（2021）
(25) 呉健堂、「意気と熱と感激を求めて」、『台北高等学校（1922年−1946年）』、蕉葉会、353頁、昭和45年12月25日発行（1970）
(26) 小西正泰、「文系の昆虫学　荒川重理」、「第３章　虫と人物と著作と」、『虫と人と本』、創森社、231頁、平成19年８月22日発行（2007）
(27) 吉田嗣義、「一村一品一人一研究」、『任運騰々』、150頁（1997）
(28) 野口周一、『ぐんまの社会教育 ― 永杉喜輔のあゆみ』、みやま文庫、64頁、平成25年１月31日発行（2013）
(29) 古庄ゆき子、『評伝　川島つゆ（上）― 己が墳は己が手で築くべきである』、67頁、平成26年10月25日発行（2014）
(30) 佐藤瑠威、「建学の精神と別府大学文学部の歴史 ― 別府大学70周年によせて ―」、『別府大学紀要』62、ⅲ、(2021)、飯沼賢司、山本晴樹、「夢の実現と継承」、『別府大学開学ものがたり』、42頁、令和３年12月18日発行（2021）

荒川重理の父重豊に関しての貴重な情報をご提供いただいた元立教大学の高橋喜代治氏、台北高等学校の資料及び下村湖人の書簡など貴重な資料をご教示、ご提供いただいた郡山女子大学の野口周一氏に感謝の意を表します。